

各地で展開する多様な「新たな公」の活動をサポート

(財)北海道開発協会では、非営利の市民団体の行う地域活性化活動に対して平成14年度から助成を行っており、これまで8年間で54件になります。これらの活動をより効果的にサポートするために、昨年度から、助成を受けた団体の方々に活動成果等を発表していただき、参加者が地域づくりなどについて自由に意見交換する「助成活動発表会・懇談会」を開催しています。6月13日に札幌市で開催された第2回の発表会・懇談会の概要をご紹介します。

民間主体の柔軟な発想での「道の駅」をつくる

活動名：上士幌町道の駅・設置調査事業

研究会は、自発的なまちづくりの実践を目的に平成17年4月に発足しました。上士幌町の農林業・観光・自然環境などの地域資源の調査研究、それらを有機的に組み合わせ合わせた事業おこし、働く場の創出にトライしています。昨年6月、NPO法人となりました。



小寺 友之 氏
NPO法人上士幌ニュービ
ジネス研究会

隣接する鹿追町、士幌町、足寄町の3町にある道の駅の実績をみて、上士幌町にもあれば地域活性化に有効と考え、市場性や採算性、施設内容などの調査を行いました。

その第1段階は、模擬“道の駅”実証実験です。会議から始め、アドバイザーの要請、ワークショップでの意見集約と続け、実証実験は10月11～13日の連休、国道沿線でトイレが使用できる町有地で行いました。初日の入りは100人足らずでしたので、会議を開き、急ぎょ徹夜で20枚ほどの看板を作り、産直野菜のプレゼントも実施し、2、3日目はそれぞれ450人ほど、3日間の来場者は約1,000人でした。アンケートも250

人の回答を得、道の駅に眺望やアクセスのよさが求められるなど、貴重なデータを得ることができました。

第2段階の先進地調査では、宮城県の二つの道の駅を視察。「上品（じょうぼん）の郷」は、産直野菜と生産者表示、温泉施設、バイキングレストランなどに好印象を持ちました。「あ・ら・伊達な道の駅」は、まるでドーム球場でオープン前から人だかりができ、売上は全国で2番目、4億円あるそうです。

第3段階では、「あ・ら・伊達な道の駅」の佐藤仁一社長による講演会を、教育委員会、商工会の生涯学習フェスティバル実行委員会と一緒に開催、70名の町民が参加しました。大量生産から少量多品種の「旬産旬味」に転換、倉庫なしで1日3回出荷、品薄、売れ残りを減らす工夫など大変参考になりました。

第4段階では、それまでの取り組みを総括し、平成23年に札幌から十勝まで高速道路がつながることを上士幌への観光客の誘導の機会ととらえ、「農商工連携」と「民間発想の創意工夫による“道の駅”」をキーワードに具現化する取り組みの一層の推進が必要とのまとめを行いました。

農村人材育成による田園空間づくり

活動名：空知地域における農村人材育成としての農業塾と農産市による田園空間の再生

主に空知を中心に殖民区画でできている農村風景をなんとか後世に引き継いでいきたいという思いから、平成14年に研究会を立ち上げ、滝川市江部乙の屯田兵村の歴史的環境再生や田園環境づくりの活動などを行っています。

今回は、空知地域の農村の後継



鈴木 栄基 氏
北海道農村地域環境
研究会

者問題に実際に取り組んでいる方々から意見を聞くフォーラムを中心に、それに関連する関係者へのヒアリングとワークショップを実施しました。フォーラムの基調講演の酪農学園大学長谷川豊教授は、農業高校の校長を経験され、人材育成がライフワークです。パネルディスカッションのパネラーは、長谷川教授、拓殖大学北海道短期大学（深川市）下野勝昭教授、渡辺農場（三笠市）渡辺辰一代表、コーディネーターは岐阜市立女子短大柳田良造教授です。3人からそれぞれの現場での農業活性化と人材育成の取り組みが紹介されました。

長谷川教授は38年間の農業高校を退職後、農業生産法人有限会社エイチアンドケイ、NPO法人農業塾風のがっこうを設立、社会福祉事業団太陽の園農場で障がい者を指導しています。また、岩見沢市ほのぼのふぁーむでは、離農農地15haを買い取り、企業経営者の支援を受けて担い手養成施設に利用しています。

拓殖大学北海道短大には故相馬暁先生がつくった全国唯一の新規就農システムがあります。下野教授からは6年間の成果を含む現状と課題をお話いただき、意見交換しました。学生はプロの農家の指導を受け、27名の卒業生の半数は農業に従事しています。

若い農場主としてがんばっている渡辺さんからは、観光農場特区を目指し、消費者との接点を非常にうまくとらえようとしている取り組みです。新しい農業の価値をゼロから目指そうとZEROプロジェクトを立ち上げ、観光をベースに、芸術あり、スポーツありと、都市の人がなじみやすい活動を始め、向上心旺盛な若者を集めています。また、原人キャンプなどのイベントを多様に展開、子どもたちの農業への関心呼び寄せて作物を育てながら、子どもを育てていくという教育プログラムを実践しています。

農山村の暮らしへの関心の高まりを背景に新規就農のニーズは少なくありませんが、資金面等でのハードルが高く、新規就農できる者は希望者の1割にも達していないのが現状です。希望者が就農でき、広汎な農業への応援団を形成する仕組み、具体的には農村の非農家層、田園住宅、クラインガルテンや週末農業など

農業に関心を持つ都市住民すべてを農業の応援団として活用すべき時代が到来していると感じています。

積丹の歴史・伝統・文化を後世に継承

活動名：積丹町美国鯉場プロムナードの整備



澤田 哲 氏
積丹町美国鯉場プロムナード研究会

研究会は、積丹町美国地区に残るニシン漁の往時をしのばせる建造物を保存・活用しながら地域の再生・活性化を目指そうと、昨年4月に立ち上げました。積丹町所有の鯉番屋の旧ヤマシメ福井邸が売りに出ていることを聞いた有志が、自分たちの手で保存するので残してほ

しいと申し入れ、売却を白紙にして、活動が始まりました。一番の問題はお金がないということでした。屋根の全面改修には300万円ほどかかります。寄附や会費程度では困難でした。いろいろな方々からアドバイスをいただきました。最終的には、保存活用する福井邸を核として15、6棟ある石蔵を結ぶ「小道づくり」を行い、美国地区の活性化を目指す考え方がまとまりました。そして、昨年10月に研究会は、「積丹町美国鯉場遊歩道“やん集小道づくり”推進協議会」に発展的に移行しました。

毎月24日を「ニシンの日」として定例会を開き、昔、鯉漁に携わった方からお話を聞きながら自分たちのイメージを膨らませています。また、今年2月には、歴史的な建造物を地域の活性化にどう結びつけるか、北海道職業能力開発大学の駒木定正先生の講演会を開催、町内から3、40名の方々が参加しました。

福井邸は町有財産ですが、今年3月、無償貸出が町議会に提案され、さらにこれらの土地建物を協議会に無償譲渡すべきであるとの結論をいただき、責任を感じています。また、今年度は太陽地域づくり財団の助成を受け、本格的な修理までは行きませんが、6月からとりあえず屋根の改修作業にかかっています。9月の連休には建物を生かしたイベントを地域の商店街などを巻き込んで開催したいと計画しています。現在はNPOなど法人化を検討、早い機会に法人として対応できる体制にしたいと考えています。

農とくらしの「顔の見える交流」の試み

活動名：新しい農村コミュニティと大都市圏郊外商店街との交流

大雪山麓に住み、カントリーライフに興味を持つものが集い、5年ほど前に「大雪カントリーライフ研究会」（通称：大雪カントリーサロン）をつくりました。現在、メンバーは80名ほどで例会等への参加は2、30名、地元の農家や事業者、移住してきた人、行政職員などが会員です。月1回の例会は旭川の周辺も含めた大雪山の見える地域で開催し、会費などは設けず、食費として1,000円を徴収しその町の特産品（例えば愛別町ならばキノコの料理）などの昼食を取りながら2～3時間くらい、会員からの話題を中心に意見交換をしています。

私たちの研究会の目的は、大雪圏域においても多くの課題を抱える農山村地域の再生を図るために、新しい農山村コミュニティづくりを進めることです。このため、まず地域住民の意識を変える「知産知消の推進」や「都市との多面的な交流」が必要であると考えました。首都圏で、特に高度成長期に造成された団地は住民が高齢化し、その商店街も大きな課題を抱えています。そうした商店街と私たちの農山村地域とが連携し、「知産知消」をキーワードとして、お互いに顔の見えるつながりを作ることに取り組みました。

昨年は当サロンの農家のお母さんたちが首都圏へ出向き、団地の奥さん方を対象とした試食会やフォーラムなどを3回開催（横浜市青葉台、天王町、東京都四谷）し、大雪圏域をPRするとともに生産者に消費者を知っていただきました（知消）し、また、冬季には首都圏の団地の方々にモニターツアーとして大雪地域へ来ていただき、生産地の暮らしや地域を知ってもらう事業（知産）も実施しました。内容は、農家との懇談やサロンへの参加、越冬野菜の氷室見学、犬ぞり体験など単なる観光ツアーではない地域との交流を盛り込んだものを行いました。

*



長谷川寛治 氏
大雪カントリーライフ研究会

研究会で発行している情報誌「大雪カントリーサロン」は移住してくださいというPR誌ではなく、大雪圏域の暮らしを知っていただくために、自分たちの暮らしを自分たちの文章で、私たちはこんな暮らしをしているのですよという語りかけを住んでいる側から発信する情報誌です。首都圏の市町村ふるさと回帰支援センターなどに置いていただいたり、移住に関する相談会などのときに関連町村の方が持っていらしています。

今回のモニターツアーでは、北海道に来ていただくのであればやはり冬を見てもらうのが一番ということで冬季間のツアーとして企画しました。参加者の平均年齢60歳位で、男性は2名で残り7名は女性でした。大雪圏域といっても雪の多い地域と少ない地域などいろいろな地域の特色がありますが、私も北海道へ移住して農業のある暮らし、田舎暮らしを始めましたが、雪が多い地域であったことから農道を使った犬ぞり体験ツアーを始めました。大雪原を犬ぞりで走る楽しさは雪が多く寒い冬を逆手にとって、地域の特性を貴重な体験観光の資源として活用できる事例であると思います。犬ぞりツアーの後の暖かいお風呂とおいしい食事は、また、格別であったと思います。



村上京子 氏
大雪カントリーライフ研究会

オホーツクのホットな魅力を全国発信

活動名：地域SNSを利用した地域コミュニティ創出事業



宮田博行 氏
NPO法人オホーツク21世紀を創る会

昨年、20周年を迎えたオホーツク21世紀を考える会が、NPO法人化し、「オホーツク21世紀を創る会」として活動を始めました。私はIT部門担当として「地域コミュニティ創出委員会」を立ち上げました。

オホーツクだけでなく、北海道全体もその魅力ある資源を生かすためには情報の共有

化が必要ですが、なかなか有効なツールは見当たりません。平成17年に「オホーツクコネクト」という地域SNSを立ち上げていますが使われないままだったので、助成金を使って、コミュニティ機能を充実させて利用促進を図り、新しいオホーツクの魅力の発見や活用アイデアの発掘などを行い、情報を全国に発信することにより地域の活性化を図ることにしました。また、地域SNSを知ってもらい、使ってもらう目的でパンフレットを作成し、「地域SNSの現状と今後の展望」というテーマで活用セミナーを行いました。

セミナーでは、国際大学グローバル・コミュニケーション・センターの庄司昌彦主任研究員、北海道開発協会開発調査総合研究所の草苺健主任研究員による地域SNSの説明と意見交換があり、約100名の参加者には理解していただけたと思います。その後、興味のある方、会員になっていただいた方を対象に、実際にインターネットにつないで使う利用講習会も実施しました。会員数はセミナー開催前の26名が、現在は126名まで増え、書き込み回数やブログを更新する回数も増えました。しかし、期待していた地域活動団体への浸透がなかなか難しく、今後はネット上だけではなく、地域の各団体の方々とコミュニケーションを図りながら、利用していただけるようにPRや提案をしていきたいと思っています。そして、ホームページの「オホーツクファンタジア」と地域SNSの垣根をなくすような融合を図り、オホーツク地域のホットな魅力情報を発信するツールにしたいと考えています。

網羅的・持続的に江別の「今」を後世に伝える

活動名：江別の歴史と環境文化を後世に伝える デジタルアーカイブ事業



渡邊 慎哉 氏
江別の歴史と環境文化を
後世に伝える会

札幌学院大学電子ビジネス研究センターでは、江別市の古いフィルム写真を高密度でスキャンしてデジタルアーカイブする活動をしています。写真は何十年かすると風化し、写されていた江別の歴史そのものが消えてしまうので、デ

ジタル化して保存し、後世に伝えていくというものです。これまで市内各所で講演やデモンストレーションを重ねるうちに、賛同してくれる市民との交流も深まってきました。そこで、市民との合同組織をつくれればもっと幅広い活動が展開できるということで、平成20年に任意団体の「江別の歴史と環境文化を後世に伝える会」を設立しました。現在の会員数は30名ほどです。

地域にとっては、その地域の歴史・文化、まちなみは重要な財産ですが、そのままにしておくと必ず風化してなくなってしまいます。まちなみや貴重な事物の映像を後世に残す活動は「地域デジタルアーカイブ」といわれ、各地域で行われていますが、システムティックに行われているものは多くはありません。私たちの「江別NOWワンショット事業」は、私たちの手だけでなく、住民参加で持続的に記録して集約するためのシステムティックなインフラをつくりたいという提案です。私たちだけでは限界がありますが、地域住民が協力・参加してくれば、空間的な網羅性、例えば江別のいろいろなところの写真が手に入り、また、毎年繰り返すことで時間的にも持続性ができ、網羅性と持続性を担保できる事業となります。

事業内容としては、市民がデジカメや携帯でまちなみを撮影し、それをアップロードしたり閲覧することが可能なWebベースシステムをつくり、市民に協力していただくための広報チラシを作成しています。

今後は、このワンショット事業を軌道に載せることを最優先課題に、そして研究センターでアーカイブしている古い江別の写真と今の江別とを融合し、もっとタイムラインを長くとった江別の時系列的な歴史をつくっていくという方向を検討、またイベントなどを通じて、江別の今を保存することの大切さを市民に理解してもらおう活動をします。ワンショット事業の著作権は私たちの会に帰属しますから、教育現場とタイアップして授業に活用してもらおうなど、さまざまな地域組織と協働する仕組みをつくっていききたいと考えています。